

現地聞き取り調査および資料収集による南海地震前の異常潮位について

重富國宏・梅田康弘・尾上謙介・浅田照行・細善信・近藤和男・辰己賢一

1.はじめに

昭和南海地震（1946、M8.0）の1週間前から直前にかけて、紀伊半島から四国の太平洋沿岸の広い範囲で、井戸水が減った或いは涸れたという報告がある（水路局、水路要報、1948）。梅田・他は、地震前に井戸水が減少するメカニズムについてのモデルを提唱している（地震予知連絡会報、第70巻、2003）。モデルには検証が必要である。梅田モデルにおいては、地震前のプレスリップを前提にしている。橋本は、昭和南海地震のコサイスマック断層モデルを基にシミュレーションをおこない、地震前の井戸水低下がみられた地域がプレスリップによる隆起域と矛盾しないプレスリップ断層モデルを提唱した（地震予知連絡会報、第70巻、2003）。これにより、梅田モデルは一つの現実性を得たといえる。一方、地震前の隆起を直接裏付ける明確な観測事実は見出されていない。そこで我々は、地震前の隆起・沈降現象と関連がある可能性が考えられる地震前の異常潮位現象に注目し、資料・証言等による調査を試みた。

2.南海地震前の異常潮位

昭和南海地震前の海底地殻変動（隆起）の可能性を示唆する異常潮位について記されているものに、高知県須崎市発行（1995）の「海からの警告」がある。そこに、地震発生前日の夜半から地震発生の直前までの、

須崎市野見湾における異常潮位についての漁師の証言が纏められている。その概要については、前回の本講演会で紹介した。また、野見湾近くの久通沖では、地震前日出漁中の烏賊釣船が漁場を替える毎に碇網に泥の附着があり、干潮が異常に激しかったとの証言もある（大山厚編、南海大地震災害誌、1946）。その他、高知県下の室戸・宇佐・安和、高知でも異常潮位の報告がみられた。一方、和歌山県串本町では、地震前に海水が海岸沿いの道路にまで溢れたとの報告もある。また、安政南海地震前にも高知市下知川河口での異常潮位があったとの史料もみられた。

3.異常潮位はプレスリップによるものか？

これまでの調査によって明らかになった異常潮位は、室戸、高知、須崎（野見湾・久通沖・安和海岸）では潮位の減少、串本では潮位の上昇を示している。潮位の異常減少は海底の隆起に、潮位上昇を海底の沈降に因るものとすれば、室戸を除き、橋本のプレスリップモデルによる隆起・沈降域と定性的には矛盾しない。しかし、この異常潮位が全てプレスリップによる海底の隆起・沈降に因るものだとすると、量的には説明が困難である。例えば、野見湾においては、およそ3mにも及ぶ潮位の減少をみている。現在のところ、この矛盾を解決するモデルの提唱には至っていない。

